

十勝の畑地は緑と土色のモザイクである。そして、眩しいばかりの新緑の防風林が境界を明確に区分している。冬に植えつけられた小麦や飢え付けられたばかりの甜菜が、例年にない少雨のため順調に生育するかどうか農家は危惧しているようだ。本日は正に慈雨か。生気を取り戻すだろう。

さて、帯広を軍都というと、誰しも怪訝な顔をするに違いない。帯広が軍都となったのは、先の大戦で戦局が著しく日本側に不利になった昭和 19 年(1944)のことであり、それ以前には、飛行部隊が常駐していたに過ぎなかった。即ち、帯広町の熱心な誘致運動もあって、昭和 11 年に浜松の飛行戦隊の一部が、当時民間飛行場があった“緑ヶ丘飛行場(現市営球場付近)に移駐(翌 12 年 10 月から飛行場建設開始)、昭和 15 年には皇紀 2600 年記念式典に参加した浜松の飛行 62 戦隊が式典後進路を転じ帯広に移駐した。この飛行第 62 戦隊は、双発の 97 式重爆を装備した重爆戦隊であった。関連する部隊も相前後して移駐してきた。この飛行第 62 戦隊は大東亜戦争勃発に伴い、南方軍に編入され、開戦劈頭マレー半島コタバル攻略に参戦している。

本格的に大部隊が移駐してきたのは、昭和 19 年 7 月、大本営が本土決戦準備に関する「捷号作戦」を発令してからであった。この中で、北海道方面の作戦は、捷号作戦の四号作戦と位置づけられ、発動時期は、昭和 20 年 10 月末と定められていた。

この時点における敵情判断は次の通り。「米軍は飛石作戦で、北千島を攻略することなく、直路南千島から本道に進攻すると思われる。本道へは、第一案：道東又は南千島に上陸する案(これは、帝都爆撃のための空海基地設定にあり、道東の計根別飛行場か択捉島の天寧飛行場が目標になろう。計根別攻略には、根室又は釧路に主上陸し、網走及び十勝地区に一部が上陸するであろう。)第二案：勇払海岸に上陸する案(北海道の死命を制する目的で、札幌を目標とし、苫小牧から鵜川に渡る海岸に上陸するか、一旦道東を占領したる後、この方面に来攻する公算が大きい。)」

このような情勢判断を背景とし、昭和 19 年 3 月、旭川第 7 師団が野戦師団に戦時編成(編成替えと同時に「熊部隊」と称されるようになった。)を変え、主力は帯広、一部は北見・釧路地区へ移駐を命ぜられた。即ち、第七師団の道東進出は、従来対ソ、対米両用の含みを以ての旭川配置から、対米作戦へのシフトを意味している。万一ソ連が北海道に侵攻するとしても、矢張り千島沿いに道東に来襲する公算が大きいと判断された。

当時の陣容は、将兵約 2 万名、馬匹約 2 千頭であったと当時の鯉登師団長は述懐している。この戦力をどう評価するか、開戦以来七師団からは一木支隊(歩兵 28 聯隊、工兵第 7 聯隊第一中隊)をあのカダルカナル島に、また北海支隊(歩兵第 27 聯隊で編成)をアリューシャンに、東支隊(26 聯隊(2 個大隊基幹)、27 聯隊 1 大隊、山砲兵第 7 聯隊第 2 大隊基幹)を千島に派遣しているので、初年兵も旭川に残置しており、実戦力としては、かなり低下していたと言わざるを得ない。実態としては「熊兵団」の異名にそぐわなかった。

同じ頃、北海道全域に展開した第一飛行師団の師団司令部が帯広に進出、大谷女学校に司令部を置いた。同師団の保有機数は約 180 機であった。これらの師団に先立ち、高射砲 24 聯隊が音更町鈴蘭台に、戦車 22 聯隊が同じく鈴蘭台に配置されていた。(他の部隊は省略)

こうして、当時人口約 22 万人の十勝に 3~4 万人の陸軍が展開し、文字通り帯広は軍都となったのである。熊部隊主要部隊の配置は、歩兵 26 聯隊：音更村十勝大橋下流、歩兵 27 聯隊：釧路村天寧、歩兵 28 聯隊：北見市競馬場、搜索第 7 聯隊：厚床、山砲兵第 7 聯隊：池田村清見が丘公園、工兵第 7 聯隊：帯広中学校校庭、輜重兵第 7 聯隊：芽室村芽室公園、師団通信隊：音

更村下士幌、師団衛生隊：日高国浦賀、等々である。

では、熊師団は、地下式に編成した堅固な陣地により、来攻する敵に対し、多大の出血を強要すると共に、敵艦砲の射程外に設けた骨幹陣地によりこれを撃滅するを方針として、各地区別では、次のように作戦を指導した。

根室地区においては、海岸の水際陣地で撃滅を期す。万一の場合は、温根沼付近を確保し、根釧原野への進攻を阻止する。釧路方面では、当初は水際撃滅主義であったが、爾後変更され、敵艦砲の射程外で敵の撃滅を期す。釧路湿地帯は遊撃地帯とし、挺身奇襲により漸滅する。釧路地区への部隊集中のための機動路として浦幌～白糠～釧路間の仙道を軍用トラック道に改修した。十勝地区に於いては、方面軍所命のトーチカを連ねた水際陣地を構築し、水際から大樹付近に亘り、数線に及ぶ拠点陣地を堅固に編成して、敵の来攻に当たっては、被我混戦状態を作為し、この間、所要の正面に戦力を集中し撃滅するという機動的防御であった。

万止むを得ない場合には阿寒一帯に複郭陣地を構築、この複郭陣地を拠点としてゲリラ活動により敵の計根別飛行場使用を阻止するとの構想であった。（計根別飛行場は、現在別海駐屯地に隣接する航空自衛隊の計根別場外着陸場である。当時は第4飛行場まで設けられており、このうち第2と第3は擬装用であり、板張りや網張りの滑走路、開進には四飛行機が5機並べられていたという。当時の第1飛行場は滑走路約1200mであり、B-29爆撃機の離発着が可能であった。）

築城構想としては、骨幹となる陣地を①十勝沿岸大樹付近②釧路オコツナイ（釧路市街東側）③標津西方の武佐岳付近④女満別付近とし、砲爆撃に耐え、多数の戦車を撃滅出来るような隠頭陣地を考案することとした。陣地の主要部は、地下10m以下に収め、コンクリート厚も最小限1m、重要なものは1.5～2mとし、発電、排水、換気施設完備。対戦車防御のため、骨幹陣地前方に坑道陣地を構築して、爆薬搭載のトロを準備し、これを敵戦車にぶつけて撃破しようとした。

このような構想に基づき各部隊は、陣地構築を開始した。然しながら、終戦までの間に進捗したのは全体の5%程度であった。

そのトーチカや陣地の跡を随所に見掛けることが出来る。しかし、それらは次第に風化し、朽ち、それが如何なる意味を持つのかも知られることなく砂に埋もれようとしている。十勝の海岸沿いを飛行するとトーチカがむき出しになっているのを幾つか確認出来る。十勝海岸壁の立岩には今なお銃丸部が明瞭に確認出来る（筈だ。近々に確認したい。）写真をアップしたい。

当師団の心ある先輩が調査した資料がある。浜大樹、十勝川河口、釧路地区のトーチカ等を撮影しており、非常に貴重なものである。同じく、7師団の陣地配備図も調査されて残されている。

第5師団に勤務する者の一人として、我等が警備地区内における先人達の苦勞の跡を偲ぶ事は故なきことではない。幸いなことに富士学校で戦史教官として勤務した阿部1尉が4連隊の科長として着任した。彼が、熊師団の作戦構想や準備状況等に詳しくかしてくることを期待する。先人の事績を後世にしっかりした形で残すことは我等の務めでもある。

道東正面に米空母部隊が来襲し、昭和20年7月14日、15日、根室、釧路、帯広、本別等を空襲した。この米軍機の攻撃に帯広駅も被害を受けた。迎撃すべき航空機を、既に日本軍は有していなかった。

（参考：朝雲新聞社の戦史叢書44巻、多田勝秋氏「帯広地区の防衛」とかちの戦後50年（十勝毎日新聞社平成7年7月からの連載記事、別海町史等）